

(2) 事實の歪曲、數字の虚構

第二、——ブルジョアジーの支配する世界に生れ、ブルジョア・イデオロギイを叩き込まれて人となつた高橋氏が、卒然として新興の労働運動に興味を有ち、「左翼」は怪しかんと痛感し、あわてゝ革命家レーニンの「帝國主義論」を漁り、何が何やらわからずに讀了し、すべてを「相對的意味」に解釋し、變手古な「獨創」を誇負しつゝ、意識的無意識的にブルジョアジーの捕虜となり、手先きとなつたからと言つても吾々は敢へて驚かないであらう。だが、均しくブルジョアジーに奉へるにしても、もう少し氣の利いた方法がなかつたものか？ 氏が大威張りのその八頁にも亘る論證は、いつたい何のさまか？ 私は、拙稿の七四頁¹⁾で如何にそれを批判して置いたか？ 高橋氏よ、悔しくても答へられないのか？ それとも見落したのか？ 答へられるなら御答へあれ、もう一度ハッキリと指摘して置く、——あなたの論證の杜撰と、誤謬と、虚構と、歪曲とのかす／＼を。

(一)、氏は、各國の帝國主義的地位を知る爲めに「資源の獨占」を見ると稱しながら、たゞ重要生産物の單なる生産高を比較してゐるに過ぎない。それでよいのであるか？

(二)、その生産高を比較した表には、日本については、石炭の生産高は實際の約十分の一に減らしてあり、鐵と鋼鐵は全然載せてない、善意に解してもそれらは一ヶ月平均千噸以下の生産高とい

1) 本書 140—4頁。

ふことになつてゐる。それでよいのであるか？ 如何に、日本ブルジョアジーの分け前の小なることを強調する爲めとは言へ、そんなに數字までゴマ化してよいのか？

(三)、英帝國の中には、加奈太や濠洲を、米帝國にはメキシコまでを加算した生産高を示しながら、日本帝國になると支那、滿洲は論、朝鮮をさへ除外してある。それで比較が出来るのであるか？ 事實において、支那に産出される石炭の四分の一以上と、鐵鑛石の殆ど全部は日本が投じた資本の支配下にある。かやうに、最も重要な帝國主義的意義ある部分を何故ことさらに除外したのであるか？

(四)、各國の帝國主義的獨占を比較するに當り、棉花や小麥や米のやうな農産物の生産高などを比較することに何の意味があるか？ 後進國こそが概して農産物を多く生産するではないか？ 植民地でさへも、帝國主義的搾取の進行につれて農産物の生産は減退する。

(五)、更に、「販路の獨占」において「日本の占むる所」を、他國と比較すると稱して、單に植民地を含めた各國の面積人口を比較し、「日本の占むる所は、文字通り猫額大の所であつて、英米獨佛露等の占むる所とは丸で御話にならぬ。例へば日本は僅かに八千萬人の人口を占むるに過ぎないが、英國は四億四千萬餘人を、米國は約一億二千萬人を、露國は一億三千万人を、佛國は約一億人を、支那は約四億人を獨占してゐる。乃至は獨占し得る(一)地位(特に支那について云へば)に

在る。』とは、いつたい何のことか？ まるで子供だましではないか？ 砂漠や寒帯を含めた單なる面積の大小が、何で『販路の獨占』の程度をあらはす？ また、單なる人口の大小が、何で『販路の獨占』の程度をあらはす？ 商品の種類と、世界市場における競争力と、人口の購買力とを無視して、如何に市場獨占の程度を論定し得るか？ 最近までドイツの染料は日本市場を獨占し、現に日本の生糸は米國市場に獨占的地位を有することを知らないのであるか？

(六)、更に高橋氏は、日本の無産階級が英米佛に對し「人口戦争」を敢行すべき理由として、諸國の人口の密度を比較し、『今日「帝國主義」的日本の地位を見るに方つては、この人口問題を無視することはどうしても出來ない。然るに第十四表に示す通り、日本は一方哩實に、三百九人半と云ふ過剰の人口を抱えてゐるにも拘らず、英米露佛等は僅かに十六人乃至三十人内外である。この點から云へば、いま、日本は、最も「領土」の獨占到由つて苦んでゐる國であり、消極的に搾取せられてゐる國である。』といつてゐる。資本主義國に於ける人口の密度の大なることは、その國が他國によつて搾取されてゐることをあらはすといつた、たわいもないことは、今では、最も反動的なブルジョア學者でさへめつたに言はない。が、それにしても、高橋氏が算出して讀者に示した一方哩當の人口が、英國ではたつた三〇人、伊太利では五七人、和蘭でさへ五九人といふ少數なのに、ひとり日本のみが三〇九人といふケタ違ひの大きさであるのはどうした譯か？ 日本を「被搾取國」に變装せ

2) 太陽四月號 30頁。著書 86頁

3) 太陽 四月號 31—2頁。著書 88頁

しむべくあらゆる獨創力を發揮する高橋氏は、各國の本國及び植民地の面積を合計し、人口を合計し、前者で後者を割つたのである！かくして、日本は、支那よりも、ひどく搾取されてゐる國である、日本帝國の人口は一方哩當り三〇九人だのに、「支那帝國」はたつた九三人に過ぎない。そして、それが資本主義日本の「帝國主義的地位」であるといふのだ！ 高橋氏よ、それでよいのであるか？ (七)、高橋氏の人口密度統計表には、事實、「支那帝國」だか、「露帝國」だかといふものが載つてゐる。しかも、その表は、一九二五年度のアルマナクに由ると附記してある。そしてそれには不思議にも獨逸が抜けてゐる。が、抜けねばならぬ譯ではないか、ドイツの一方哩當人口は、四五〇人ほどで、日本の三〇九人を突破し、「人口戦争」のお株がドイツに移る恐れがあるのだ。高橋氏よ、それでドイツだけは、そつと表から抜いたのか？ (讀者諸君、高橋氏の統計表は全然信頼すべからざるものである。氏は數字に基づいて主張を立てゝゐるのではない。自己の獨斷的な主張を裏づけるに都合のよいやうに數字を増減し、勝手にそれを組合せた統計表、——それを麗々と並べたものに過ぎない。高橋氏が、八頁にも亘つて論じたといふその八頁の半分は、此の、人を喰つた統計で埋めてある。氏の統計は、讀者をおどかす鬼面に過ぎない。だが、日和見主義者の「論證」が如何に虚妄に充ちたものであるかを知るには、それらの統計表は餘りにも模範的である。だから私は、特に、それらを次に掲げて置く。

米國	比律賓	玖瑪	メキシコ	以上合計	佛帝國	佛蘭西	モロッコ	佛領印度	以上合計	獨逸	露國	伊太利	世界(其他)	總計(共)
五三,七七〇,七七七				五三,七七〇,七七七	一六八,七〇〇,六二二	一〇,八六三			一七九,五七〇,六二二	三三,七三三,一〇〇	一四八,一五〇	一〇三,〇八八	一八三,八三三	八三三,〇八三
0% 五	0% 九		1% 五	3% 四				3% 〇	3% 〇			0% 三	100% 〇	100% 〇
一,九六〇,二二八	三三二	四,〇〇七		六,三三二,二二八	四二				四九二	一,一四七	三六七	三三二	六九,六九三,七六八	二,二七二
二六二				二六二	元			元	元	元	元	元	六九,八三七	八,二三四
四九,二六八				四九,二六八	三,九六八				三,九六八	一五,〇九二			一〇七,四三二	一〇七,四三二
五二,一六九			一八五,〇七	七六,二三六					八五二,五〇〇	三三,〇二二		三三	八五二,五〇〇	八五二,五〇〇
三,六八三				三,六八三	四二五				四二五	五二五			六,〇〇四	六,〇〇四
二,六三四				二,六三四	六三六				六三六	六三六			五,一九二	五,一九二
四三,〇二〇		10,六九四		四三,〇二〇					一七,〇〇〇				八六〇,五〇%	八六〇,五〇%

(備考) ◆米國の砂糖産額中にはハワイを含む。(1)及(2)は「International Crop Report and Agricultural Statistics」に由る。(3)は農商務省食糧局調。(5)は「Annual Cotton Handbook」

に由る。(6)は「The Textile Division of U. S. A.」に由る。(7)は米國綿業協會調に由る。但し東洋のそれは輸出高。(8)(9)(10)(11)は國際聯盟調査に主として由る。(9)及(11)は「Mineral Industry」に由る。(4)は「Willet and Gray」に由る。

(十三) 世界主要諸國領土及人口表

日本帝國	英帝國	米合衆帝國	露帝國	佛帝國	支那帝國	和蘭	伊太利	本國		帝國		總計		
								面積	人口	面積	人口	面積	人口	一方哩當
一四八,七五六	九五,〇〇一			二二二,六九九	一,五三三,四一〇	一三,二〇五	二二七,九八二	五八,四八二	四四,一四七	二六〇,七三八	八〇,七〇四	一〇九,五	三九二,四	三九二,四
				三九,四〇三	五七五,〇〇〇	七,〇八七	三六,八八二		四六,〇三	一三,五〇,一〇三	四四,一五九五	三〇,九	一八四,四	一八四,四
										三,七四三,五八三	一八,六四九	三一,七		
										八,二七三,一三〇	一三,四四二	一六,一		
										五,八七二,九九七	九,九,五三五	一六,八		
										四,二七二,一七〇	四〇〇,八〇〇	九三,七		
										九六二,五六九	五七,〇〇一	五九,三		
										七〇八,八四七	四〇,八八九	五七,七		

(備考) 米國ワールド新聞社發行の一九二五年度アルマナクに主として由る。氏が太陽四月號に發表した此の馬鹿げ切つた諸表の中の數字その他には、誤植や脱洩等があると

見ることは出来ぬ。何故ならそれらは、そつくり其の儘、氏の論文集『左翼運動の理論的崩壊——右翼運動の理論的根據』の中に收められてある。¹⁾ 讀者諸君は、これらの統計表を一瞥するだけでも、「右翼運動の理論的根據」が如何なるものであるかを知り得るであらう。

十、ブチ・帝國主義者の全意圖

(1) 自國ブルジョアジの搾取の隠蔽

讀者諸君は、わが高橋龜吉が右の如き虚構と歪曲との上に如何なる主張をうち立てんとしてゐたかを記憶されるであらう。氏は主張した、『斯様な事情であるから、之を國際的に見る限り、日本は被搾取國であつて斷じて搾取國でない。被獨占國であつても決して「獨占國」ではない。被帝國主義國の仲間に入りこそすれ、決して、帝國主義的仲間に這入る地位ではない』と。今や吾々は、此の結論を導き出さんが爲めに有らゆる虚構と歪曲とを敢てした我が高橋氏の、日和見主義的全意圖を、讀者の前にあばき出さねばならぬ。

氏の日和見主義的意圖の第一は、日本の無産階級の注意を、自國の搾取階級から外國の搾取階級へと轉向せしめるにある。従つて我が無産階級の闘争をも——。即ち氏は明白に言つてゐる。

1) 同書 80—87頁

「我が輸出の大宗たる生絲にしてからが、その輸出に於て、その労働者は外國に搾取されてこそゐるが、(云ふ心は、その労働に値ひする人間なみの報酬を外國消費者(一)は支拂つてゐない(一)事實を指す)、決して、外國の消費者を搾取してはゐない。彼等繭及生絲生産者の過勞と低賃銀の有様を見るがよい。而して、この繭及生絲生産者の低賃銀は、單に日本資本家の搾取を無産階級に取戻したわけでは解決出来ないものであつて、それ以上、更に國際的手段を必要とするのである。」¹⁾ (引用文中、「云ふ心は、……」以下の括弧の中の言葉は高橋氏のものである)。

右にあらはれてゐる眞に驚嘆すべき見解、——國際貿易を通じて一國の労働者が他國の労働者を搾取するといふ見解については、吾々のすでに批判した所であるが、特に製絲労働者について言ふならば、我國の生絲は、佛蘭西、伊太利の生絲を驅逐して次第に世界市場わけても米國市場に獨占的地位を占めて來たものである。世界大戰以來、支那の生絲が、有力な競争者として現はれたとは言へ、尙ほ品質、標準化、及び商業機關の劣れる爲め、日本生絲の獨占的地位を奪ふに足らない。かくして、日本の製絲資本家及び生絲輸出商は老大な利潤をあげて來た。製絲業が尙ほカルテル化してゐない一つの理由は、彼等がかゝる獨占的市場を有したからである。我が製絲労働者のつくり出す生絲に體現される剩餘價值は、一部は製絲資本家が輸出商に賣り渡すときに實現されて彼

1) 太陽四月號 22頁。著書 73—5頁

等資本家に歸し、一部は輸出商が米國資本家に賣り渡す時に實現されて輸出商に歸す。製絲資本家のみについて言ふも、その標準的な利益は、景氣不景氣を平均して三割を下らない。日本の労働者を搾取してゐるのは、日本の製絲家の資本であり、輸出商の資本である。生絲の買手としての米國資本家は、例へば棉花の買手としての日本資本家よりも不利な地位にある。日本市場における棉花には、米國と印度と支那との競争があるが、米國市場における生絲にはそれほどの競争がないからである。言ひ換れば、生絲の場合には、米國の資本家は決して特別に安いものを日本から買つてゐるのではない。彼等はまた比較的高いものでも買ふことが出来る。何故なら彼等は、比較的優秀な組織技術を有し、且つ比較的に大きな購買力ある消費者を有つてゐるからである。日本から生絲を買つた米國資本家は、彼等の雇傭する組織労働者が、絹布に體現せしめた新らたなる剩餘價値をば、絹布を消費者に賣り渡した時に實現し、我物とする。かくして米國の組織労働者は、米國資本家に搾取されてゐる。同様に日本の製絲労働者は、日本の資本家に搾取されてゐるのである。決して米國の資本家に搾取されてゐるのではなく、まして米國の消費者——労働者——に搾取されてゐるのではない。もし、高橋氏の言ふが如く、日本の製絲労働者が米國の消費者に搾取されてゐるのであつたら、綿をつくる米國の労働者は、米綿を輸入する日本の消費者——労働者——に搾取されてゐるであらう。更にまた綿布をつくる日本の労働者は、日本綿布を輸入する支那の消費者——

労働者——に搾取されてゐるであらう。何といふ馬鹿げた話だ！ しかもそれは、各國労働者階級の國際的團結の全基礎を抹殺し去る議論ではないか。

讀者諸君、我が高橋龜吉氏は、自國の搾取者階級が利潤を絞り出すが故に生ずるところの、労働者階級の「過勞と低賃銀」を、外國のせいにしよとするのである。それこそは明かに、一方では我が労働者階級の排外心を煽り、他方では彼等を自國の搾取者階級と協調せしめんとする日和見主義的意圖ではないか？ だがしかし、かゝる日和見主義者の欺瞞が効を奏し得るのには、我國労働者階級の「過勞と低賃銀」の謂れは餘りに明白である。それは、我國の資本家が生絲の市場を海外に求めて以來、技術によつて競争する代りに常に安い勞力によつて競争して高率の利潤をあげ來たつたからではないか。此の安い勞力を維持せんが爲めに有らゆる手段を講じたからではないか。——出産を奨励し、××××××××××、「勤儉節約」を強ひて大衆の生活水準を極度に低くめ、言論、集會、結社の××××××××一切の労働運動を××××××たつたからではないか。

(2) 排外心の煽動

かくも顯著なる歴史的事實の下に、比類なき××××××を續け來たれる我が資本家階級に對し、今や被搾取階級の闘争が漸く眞剣味を帯びんとする時に當り、我が日和見主義者は早くも我が無産者階級

にとつての海外の「敵」を創作して此の闘争を鈍らしめんとするのである。例へば彼は、更に、帝國主義日本の労働者階級の生活が、如何に、他の帝國主義國の労働者階級の生活よりも低いかを切言し、この差異をば他の帝國主義國の獨占の分け前が大なることに歸さうとする。曰く

「以上に由つて分る通り、之を食料及資源の獨占と云ふ立場から見れば、日本の如きは、プチ・帝國主義國にも値しないのである。この事實は、例へば、米國や英國やその他の「帝國主義國」に於ける労働階級の生活と日本のそれを比較した、だけで、その意味はハッキリ分つて来る。實に、日本労働階級の生活は、彼等帝國主義國のそれに比せば、少し誇張的に云へば、資本家と労働者との差異がある。例へば、米國の労働者は自動車に乗り得るのだ。彼等の生活程度を想見せよ。又、濠洲あたりの労働者と日本のそれを比較せよ。英國のそれと日本のそれとを比較せよ。」

日本の労働者の或る者は、かゝるデマゴギーに耳を傾け、「自動車に乗り得る」米國の労働者を想見して敵愾心を起すかも知れない。だが、各國の労働者階級の生活程度の高低は、決して、各國の帝國主義的獨占の大小に比例しないのである。高橋氏は、資源の帝國主義的獨占を論ずる如く見せかけて、實は重要商品の單なる生産高を問題にし、更にそれをば出駄羅目に労働者階級の生活程度と結びつけたに過ぎない。一口に労働者階級の生活程度と言つても、少數の熟練工と多數の不熟練

労働者とは全く事情を異にするから一概には言へぬが、極く大ざつばに論じても、十九世紀初頭の米國労働階級の生活程度は、佛國よりも英國よりも格段に高かつたに拘らず、帝國主義的獨占の點では、米國は到底英國や佛國と比較になるものではなかつた。米國の労働者階級の生活程度の異例的に高かつたのは、米國の帝國主義的獨占の爲ではない。米國における資本主義がまだ若若しく、特に尙ほ米國労働者が自由に取得し得る豊饒な土地が米國の中部及び西部に多量に存したからである。この「自由土地」の減少、消滅につれ、——米國の帝國主義的獨占は却つて擴大したにも拘らず——、労働者階級の生活は次第に苦しくなつて來た。世界中で破格的に自動車の安い米國で自動車を買い得る労働者は、今や、比較的少數の熟練工層に存するのみである。大多數の不熟練労働者の層の大部分は移民労働者から成り、狂暴非道な搾取に反抗して屢々自然發生的な暴動をさへ起し來たつた。米國ブルジョアジーは黒人奴隷を虐使した傳統をもつてゐる。此の廣汎な被壓迫層並びにメキシコその他の被壓迫民族の反抗闘争こそは、米國の帝國主義を倒壊に導びく直接の能動的要因として、我無産階級の支持を要求するものである。更にまた高橋氏は、濠洲と日本とを比較せよと云ふ。比較して見よ、それはたゞ、帝國主義國でも何でもない濠洲の労働者の生活程度が、帝國主義的獨占を有する日本の労働者のそれよりも却つて遙かに良好なる事を示すのみではないか?!

これほど單純にして明白なる事柄の一切をゴマ化して高橋氏は言ふのだ、——我が労働者の生活

程度の低いのも見ても日本が「被帝國主義」の仲間であることがわかる、『プチ・帝國主義國にも値しない』ことがわかる、我國の労働者階級は、英米の獨占を破るべく戦争せよ、と。これはいつた何を意味する？ 他の工場よりもヒドク搾取してゐる工場の資本家なり其の手先なりが、労働者に向ひ、諸君の生活程度の低いのも見ても、うちの会社が「プチ・會社」であることがわかる、それは他の會社がこれ／＼の獨占をしてゐるからだ、ウチの會社は被搾取者の仲間でこそあれ、決して搾取者の仲間ではない、諸君の生活程度を高める唯一の道は、他の會社の獨占を破ることにあり、と説きつけるのと何處が違ふか？ そしてそれは、此の資本家なり其の手先なりが、自己に對して反抗せんとする労働者の銚先きを他に轉じ、労働者を自己と協調せしめ、資本家的×××に利用することではなくて何か？ むしろまた、他の會社、他の資本家も、それ／＼自分の労働者に同じことを説きつけるであらう。かくして労働階級の團結は阻止されて、資本家的搾取は進行する。

かゝる資本家階級の手先きたる役割を、「世界的規模」において演ぜんとする我が高橋氏は、英國や米國の資本家階級のみならず労働者階級までが、日本の労働者階級を搾取してゐると宣傳してゐることを吾々は見た。それは更に、氏が、『帝國主義國の資本家のみならず、その労働階級も被帝國主義國を搾取する』¹⁾と確言してゐることによつて最早や疑ふ餘地がない。

此の高橋氏の見解よりすれば、當然に、我が帝國主義日本の資本家のみならず労働者階級もまた

支那を搾取してゐることになる!! しかるに高橋氏は、日本の労働者階級は、英米佛と戦争する爲めに支那の被搾取大衆と手を握るべきだと説いてゐる。何といふ矛盾だ。何といふ虫のいゝ議論だ。だが、どんな矛盾をも物ともせず、虫のいゝ議論で突つ張らうとするのは、ブルジョアジーの手先きたる日和見主義者の常である。高橋氏の日和見主義的意圖の一つは、日本と支那との間の帝國主義的搾取関係をまやかす爲めに、日本を「被帝國主義國の仲間」に仕立てあげ、そして支那大衆に向つて言はうといふのだ、——なるほど日本は、すこしは支那を搾取してゐるかも知れない、しかし、日本も「搾取」されてゐる國の仲間だ、だから諸君は日本と手を握つて英米佛と戦ふべきだ、と。之れを言ひ換れば何を意味するか？ それは、支那大衆に向つて、日本ブルジョアジーの搾取にだけは反抗してくれるなと説くことではないか？ 見よ、如何に排外的日和見主義者が、自國のブルジョアジーに忠實であるかを。

(3) 人種的偏見の利用

かくして彼れは更に、最も唾棄すべき人種的偏見に訴へねばならぬ。曰く、

『亞細亞洲は、世界人口の五割三分三厘を占めながら、之を賄ふべき原料及食料は世界の約二割二分を占めてゐるに過ぎず、しかも、その大部分が、周知の如く、歐米の「帝國主義」的搾

1) 太陽四月號 4頁。著書 42頁。

取の下にあつて、白人のために運び去られるものである。『而して、周知の如く、……資源の豊富にして而かも人口の割合に少い地方の全部は、白人の独占する所であつて、有色人種には全く鎖されてゐるのである。云ふ迄もなく、日本はその閉されてゐる國の一つである。』¹⁾

讀者諸君よ、試みに想へ、没落期資本主義の現世界における帝國主義の對立抗争並びにその下に展開される各國無産階級の國際的戦線と、人種間の搾取關係との間に、少しでも本質的な結びつきがあり得るかどうか。白人種のアメリカ、フランス、イギリスのブルジョアジーは、白人種のドイツを搾取し、黄人の日本のブルジョアジーは、黄人種の××と××を搾取してゐないか？ 黄人種の××プロレタリアートは、自國を搾取する同色人種のブルジョアジーを敵とし、却つて白人種の露西亞、プロレタリアートと握手した。日本及び英國のプロレタリアートは、自國ブルジョアジーの支那に對する武力干渉に反對して、支那大衆を支持し、フランスのプロレタリアートは、自國ブルジョアジーのルール占領に反對して獨逸プロレタリアートを援けた。そして「一介の労働者」サツコ・ヴァンゼツチの爲めには世界の労働者階級が立つて米國ブルジョアジーに反抗した。階級を知つて「國境を知らない」こと、——それこそがプロレタリアートの偉大なる本質的特徴ではないか。此の本質が、隠然態を脱して漸く顯然態をとり來れること、——そこにこそ世界帝國主義の現段階の無産階級の意義の一つがあるのではないか？ あらゆる國際的罪惡を助けたところの人種的偏見に

1) 太陽四月號 29—30頁。著書 83—4頁

對する闘争において吾々が勝利を確信し得るのは、國境をさへ知らぬプロレタリアートの歴史使命を信するからではないか。しかるに我が日和見主義者は、日本のブルジョアジーがまさに現下の彼等の特殊の帝國主義的地位の故に特に強調せんと試みつゝある人種的異同の見地に自らを置き、一切の現實を無視して帝國主義の獨占的搾取關係を白人對黄人の關係に要約し、一方では日本のプロレタリアートに、英米佛の白人労働者階級を敵とせよと命じ、他方では支那プロレタリアートに、黄人ブルジョアジーの搾取には反抗するなと説かうとする。たが、眼醒めたる支那プロレタリアートは、高橋氏が得々として差し延べる手を、逆に取つて捻じ上げないであらうか。——帝國主義日本の日和見主義者よ、我々に向つて手を差し延べる前に、なぜ我々と共に黄人搾取者と闘はぬのか、吾々は現に闘ふべく強ひられてゐるのだ、君は我々に、君のブルジョアジーが「方向轉換」するまで「便々として」待てと言ふのか。

高橋總吉氏の「解放戦争」論並びにその根據たるアチ・帝國主義國論の日和見主義的本質はかくてまことに顯著である。日和見主義は、労働運動指導方針の一として、常に、プロレタリアートをば、その歴史的使命の爲めの決定的闘争への方より轉じてブルジョアジーとの妥協協調に導びかんとする意識的無意識的努力となつて現はる。かゝる努力における日和見主義者の常習手段の第

一は、自己の非科學的、小ブルジョア的議論を、科學的、無産階級的に粉飾することである。我が高橋氏にあつては即ち、虚構に充ちた數字を羅列して論證の統計的正確を装ひ、荒唐な幻想をマルクスやレーニンの權威において語つた。常習手段の第二は、自己の思想の保守的・反動的な性質上、好んで農民その他の小ブルジョア層と、小ブルジョア意識が根を張る一部の労働者層の僻見に訴へる。我が高橋にあつては、即ち、彼等の排外心と人種的偏見に投合すべく有りとあらゆる駄辯を弁した。第三は、事實上ブルジョアジーの意圖を満足せしむる指導方針を主張しながら、常に労働者階級の本質的利益を代表するかの如き口吻を装ふことである。見よ、高橋氏は、我が無産階級をして「資本主義の基礎における」國際戦争を準備せしむることにより、彼等をブルジョアジーの指導の下に立たしめ、もつてブルジョアジーの帝國主義的意圖に奉仕しながら、かゝる戦争を、無産階級の「解放戰」であると借稱したではないか。

だが、吾々の批判は、氏の所論の一切の紛飾を剝脱し、一切の欺辯を葬り、一切の欺瞞をあばきつくした。我がプロレタリアートは、泥沼の中の「ブチ・帝國主義國」なるものを、昭和の昔のブネタドイトとして、長く後世に語り傳へるであらうかどうか？（一九二七・一〇・一七）

……了……

昭和三年一月五日印刷
昭和三年一月八日發行



帝國主義研究
定價金 壹圓

著者 猪俣津南雄
發行者 山本美
印刷者 推名昇
東京市芝區田村町十五番地

發兌

東京市麴町區内幸町
一丁目三番地

改

振替口座東京八四〇二
電話銀座 五四一五
〇五七五
四五三
六八三八
造社

改造社圖書目錄 (昭和二年七月現在)

著者	書名	定価
穂積重遠著	離婚制度の研究	内一〇・三六〇
河田嗣郎著	家族制度と婦人問題	二〇〇〇
宮本英雄著	婚姻の基調	一五〇・一八〇
福田徳三著	社会運動と労働制度	二五〇〇
小泉信三著	改訂 賃金論と社会主義	三三〇〇
孫田秀春著	労働法總論	二六〇〇
富士辰馬譯	労働政策と労働組合	〇九〇・一四〇
茂森唯士譯	レーニズム	一〇二〇・一六〇
本庄榮治郎著	日本社会史	二五〇〇
本庄榮治郎著	日本財政史	二五〇〇
河田嗣郎著	農村問題と対策	二〇〇〇
河田嗣郎著	社会問題綱要	内四・五〇
河西太一郎著	農業問題研究	二〇〇〇
末弘嚴太郎著	農村法律問題	二五〇〇
末弘嚴太郎著	債の効用	二六〇〇
末弘嚴太郎著	法窓閑話	二五〇〇
佛國藏相カヨイ著 龜井買一郎譯	民衆の苦悶	一三〇〇・一六〇
森戸辰男著	青年學徒に訴ふ	二〇〇〇
森戸辰男著	學生と政治	二〇〇〇
ウヅタリマン著 森喜一譯	思想闘争史上に於ける 社会科学運動の重要性	二〇〇〇
ヨセフ・ライツェン著 山川均譯	無産階級の哲學	二〇〇〇
本庄榮治郎著	近世農村問題史論	二〇〇〇
河田嗣郎著	農政四〇十三講	二〇〇〇
平野義太郎著	法律における階級闘争	二五〇〇

小野武夫著	農村研究講話	一五〇・一八〇	山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	一五〇・一八〇
小野武夫著	日本農民史語彙	三〇〇〇	トロッツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	二〇〇〇
末弘嚴太郎著	労働法研究	三〇〇〇	フハリシ著 富士辰馬譯	唯物史觀	三〇〇〇
堀江壽一著	國際經濟總論	三〇〇〇	富士辰馬譯	世界經濟論	二〇〇〇
堀江壽一著	改訂 國際經濟と國民經濟	二五〇〇	持地六三郎著	日本植民地經濟論	二八〇〇
堀江壽一著	國際經濟と國民經濟	三〇〇〇	森戸辰男著	思想と闘争	二〇〇〇
堀江壽一著	貨幣・銀行・外國爲替(上)	三〇〇〇	高橋龜吉著	資本主義末期の研究	二五〇〇
堀江壽一著	貨幣・銀行・外國爲替(下)	三〇〇〇	渡邊一朗著	労働問題原、理	二〇〇〇
大塚金之助譯	經濟學原理(分冊一)	三〇〇〇	高島素之著	マルキシズムと國家主義	一〇〇〇
大塚金之助譯	經濟學原理(分冊二)	三〇〇〇	高島素之著	改訂 社会主義社會學	一〇〇〇
大塚金之助譯	經濟學(分冊三)需要・供給・ 原理・價值の一般關係	三〇〇〇	高島素之著	社会主義と進化論	一〇〇〇
大塚金之助譯	經濟學原理(分冊四)國 民所得の分配	三〇〇〇	カウツキイ著 高島素之譯	改訂 資本論解説	一〇〇〇
高田保馬著	階級及第三史觀	二八〇〇	口田康信著	國家思想の研究	二〇〇〇
野村兼太郎著	近世商業史	三〇〇〇	大山郁夫著	現代日本の政治過程	二五〇〇

斎藤茂吉著	正宗白鳥著	菊池 實著	高野辰之著	親佛文學會編	石原 純著	太宰施門著	武者小路實篤著	村岡典嗣著	阿部次郎著	阿部次郎著	昇 曙 夢著	野川白村著	野川白村著
朝の養	文藝評論	文藝當座帳	日本演劇の研究	ゆかり	戀愛價值論	ロマンナク時代	文學に志す人に	吉利支丹文學抄	北 郊 雜 記	學 藝 論 鈔	露國現代の思潮及文學	近代の戀愛觀	苦悶の象徵
一・五八〇	一・二八〇	一・五八〇	四・三〇〇	上三・五〇〇 特六〇二二〇	一・六八〇	二・〇八〇	一・三三〇	三・五八〇	一・九八〇	二・三〇〇	四・八〇〇	二・五三〇	一・二八〇
長谷川如是閑著	若山牧水著	賀川豊彦著	倉田百三著	窪田空穂著	若山牧水著	土岐哀果著	前田夕暮著	與謝野晶子著	木下利玄著	釋 迢 空著	中村憲吉著	古泉千櫻著	鳥木赤彦著
犬・猫・人間	樹木とその葉	星より風への通信	超 克	楓 の 木	野 原 の 郭 公	空 を 仰 ぐ	原 生 林	人 間 往 來	立 春	海やまのあひだ	松 の 芽	川 の ほとり	十 年
一・二八〇	二・三〇〇	二・三〇〇	二・三〇〇	一・三〇〇	一・三〇〇	一・三〇〇	一・三〇〇	一・三〇〇	一・三〇〇	一・三〇〇	一・三〇〇	一・三〇〇	一・五八〇

藤部謙造著	恒藤 恭著	板垣 鷹 穂著	米田庄太郎著	桑田芳蔵著	松本亦太郎著	松本亦太郎著	高柳賢三者	末川 博著	廣瀨嘉雄著	田中耕太郎著	阪内務事務官著 三宅司法書監督	朝永三十郎著	森莊三郎著
文化哲學叢書 第四卷 の哲學	文化哲學叢書 第三卷 經濟哲學	文化哲學叢書 第二卷 の歴史哲學	文化哲學叢書 第一卷 の歴史哲學	グントの民族心理學	智 能 心 理 學	心 理 學 講 義	現代法律思想の研究	ソグイェトロシア の民法と労働法	私 法 學 序 説	法と宗教と社會生活	補普通選舉法要綱	カントの平和論	法制講 話
二・〇〇〇	三・〇〇〇	一・五八〇	四・七六〇	三・五八〇	九・〇六〇	三・五八〇	四・五七〇	二・五三〇	三・〇六〇	二・五三〇	一・八六〇	一・五八〇	二・五三〇
里見 輝著	吉江喬松著	有島武郎著	松崎 實編	長尾正人譯	關 寛 之著	桑木 成雄著	辻 スマイルネル著	佐藤 繁彦著	武内 義雄著	賀川 豊彦著	長 田 新著	清原 貞雄著	植田 壽藏著
文 藝 管 見	近代文明と藝術	愛する人々へ	校切支丹鮮血遺書	遺 傳 學 概 論	學 校 兒 童 心 理 學	物 理 學 と 認 識	自 我 經 緯	體 驗 宗 教 の 研 究	老 子 の 研 究	生 存 競 争 の 哲 學	現 代 教 育 哲 學 の 根 本 問 題	日 本 道 徳 論	藝 術 哲 學
一・二六〇	二・〇〇〇	三・〇〇〇	三・五八〇	一・八〇〇	二・七三〇	一・五八〇	二・二二〇	二・〇〇〇	三・五八〇	二・〇二〇	三・〇〇〇	四・五〇〇	二・七〇〇

芥川龍之介著	支那遊記	二〇〇	香山 著者	改造社運動	ラグビー	二五〇
賀川豊彦著	雲水通路	三〇〇	東京帝大編	改造社運動	スキー初歩	一五〇
石川 山田 光 共著	在 月 歌 通 信	二〇〇	長谷川 宗憲著	改造社運動	ボート	三三〇
桑木 成雄著	物理學と認識	一五〇	橫 有恒著	山	行	三三〇
佐藤 充共著	近代物理學概観	三〇〇	賀川 豊彦著	長篇 死線を越えて(上巻)		一〇〇
中澤 隆川著	電子説から見た世界	一八〇	賀川 豊彦著	長篇 死線を越えて(中巻)	太陽を射るもの	一〇〇
佐藤 春夫著	童話ノチオ	一八〇	賀川 豊彦著	長篇 死線を越えて(下巻)	壁の聲	一〇〇
岡 寛之著	學校兒童心理學	二七〇	志賀 直哉著	直哉傑作選集	々	二五〇
佐藤 春夫著	船の大旅行	三三〇	芥川 龍之介著	沙羅の花		二二〇
龍谷 一彌著	改造社運動	二二〇	里見 弴著	改直 輔の夢		二五〇
三宅 大輔著	改造社運動	二二〇	武者小路實篤著	第三の睡者の運命		二九〇
梅澤 親光著	改造社運動	二〇〇	武者小路實篤著	曲愛		一六〇
平井 左門著	改造社運動	二五〇	正宗 白鳥著	曲ある心の影		一六〇

堺 利彦著	野外劇の一幕	一五〇	板垣 慶徳著	美術史表現と背景	三二〇
中澤 隆川著	嵐の庭前	一五〇	岸田 劉生著	圖書教育論	三二〇
高濱 虚子著	朝の向くまゝ	一七〇	矢代 幸雄著	太陽を慕ふ者	一五〇
武者小路實篤著	毎日の向くまゝ	二二〇	木下 幸太郎著	支那南北記	三〇〇
河東 碧梧桐著	二重生活	一六〇	改造社編	大正大製火災誌	内 一五〇
新村 出著	南蠻更紗	二六〇	高瀬 毅著	ツタンカーメンの生涯と時代	一八〇
野口 米次郎著	先驅者の言葉	一八〇	村松 梢風著	近世名匠列傳	二二〇
野口 米次郎著	坐る人間の評論	二〇〇	山川 均著	改レニントトロツキ	一五〇
宮田 仙著	溪仙八十一話	三〇〇	大杉 榮著	自 伝	二〇〇
岸田 國士著	言葉・言葉・言葉	一八〇	幸田 露伴著	平 生 傳	二二〇
幸田 露伴著	幽 秘 記	二五〇	幸田 露伴著	頼 朝・爲 朝 門 傳	二二〇
幸田 露伴著	龍 姿 蛇 姿	二五〇	柳澤 健著	ジヤンジョレス	一五〇
土肥 慶藏著	鶴 軒 遊 戯	三〇〇	堺 利彦著	堺 利彦 傳	二九〇
瀧 精一著	文人畫概論	二〇〇	野口 源三郎著	オリソピアへの旅	二五〇

泉 鏡花著	香 町 夜 講	二二〇〇	北村壽夫著	幻の部屋	一六八〇
谷崎潤一郎著	新選谷崎潤一郎集	内五三七〇	長田幹彦著	戯愛僧篇	一六八〇
谷崎潤一郎著	愛すればこそ	一〇六〇	吉田絃二郎著	運命の秋	二〇〇〇
里見 弴著	大道無門	二〇〇〇	吉田絃二郎著	父	一三九〇
谷崎潤一郎著	痴人の愛	二〇〇〇	吉田絃二郎著	ダビデと子たち	一八〇〇
谷崎潤一郎著	鮫人	二〇〇〇	吉田絃二郎著	芭蕉	一六八〇
中河與一著	赤い屋根	二〇〇〇	吉田絃二郎著	一人歩む	一八二〇
武林無想庵著	恐ろしき私	一八八〇	吉田絃二郎著	旅人	一八〇〇
片岡鐵兵著	文明病患者	二二〇〇	小山内薫著	戯森有禮	一三三〇
葛西善藏著	綱の上の少女	二〇〇〇	岡本綺堂著	江戸子の死	二〇二〇
近松秋江著	哀しき父	一九〇〇	國枝史郎著	劍俠受難	一〇八〇
犬養 健著	二人の獨り者	二〇〇〇	志賀直哉著	山科の記憶	一五〇〇
大養 健著	一つの時代	二二五〇	室生犀星著	庭を造る人	二〇〇〇
鈴木斐子譯	みつげもの	一五八〇	江見水蔭著	明治文學資料第一卷 硯友社と紅葉	一五〇〇

正宗白鳥著	安土の春	一三六〇	里見 弴著	縁談	二二二〇
正宗白鳥著	歡迎されぬ男	一五八〇	前田河廣一郎譯	義人ジミ	二〇〇〇
鈴木斐子譯	血と砂	二二六〇	葉山嘉樹著	海に生くる人々	一五八〇
田沼利男譯	鬼火の踊り	一八八〇	御原燁子著	則天武后	一六八〇
廣津和郎著	秋の一夜	一六八〇	山本有三著	嬰児殺し	二〇〇〇
藤森成吉著	顔み笑ふ	一三三〇	菊池 寛著	戀愛病患者	一五八〇
藤森成吉著	故郷	一五八〇	菊池 寛著	啓吉物語	二〇二〇
野上彌生子著	海神丸其他	一三三〇	菊池 寛著	第二の接吻	二〇〇〇
岸田國士著	麵飽屋文六の思案	一三三〇	三宅ヤナ子著	奔流	二二〇〇
佐藤春夫著	窓展	二〇〇〇	横光利一著	春は馬車に乗って	一八八〇
徳田秋聲著	過ぎ行く日	一八〇〇	池谷信三郎譯	一週間	一九八〇
細井和喜藏著	工場	二〇〇〇	田中貢太郎著	蛇精	一九〇〇
細井和喜藏著	奴隷	二〇〇〇	内多精一譯	薄命のデュード	三二四〇
細井和喜藏著	無限の鐘	二〇八〇	細田民樹著	或兵卒の記録	二二二〇

著 一 歸 江 堀 博士 法學

<p>英國預金銀行論</p> <p><small>「貨幣・銀行・外國爲替」特殊問題研究第二</small></p>	<p>金貨本位制の興廢</p> <p><small>「貨幣・銀行・外國爲替」特殊問題研究第一</small></p>	<p>貨幣・銀行・外國貨爲替(下卷)</p>	<p>貨幣・銀行・外國爲替(上卷)</p>	<p>續國際經濟と國民經濟</p>	<p>改訂國際經濟と國民經濟</p>	<p>國際經濟總論</p>
<p>上四六判製</p>	<p>上四六判製</p>	<p>上菊製判</p>	<p>上菊製判</p>	<p>上四六判製</p>	<p>上菊製判</p>	<p>上菊製判</p>
<p>定價 壹圓 送料 十八錢</p>	<p>定價 壹圓 送料 十八錢</p>	<p>定價 四圓 送料 三十錢</p>	<p>定價 三圓 送料 三十錢</p>	<p>定價 三圓五十錢 送料 二十二錢</p>	<p>定價 三圓五十錢 送料 二十六錢</p>	<p>定價 三圓三十錢 送料 二十六錢</p>

30 N-12





